

避難訓練

校長 八木澤 龍馬

9月1日は「防災の日」でした。台風や地震などの災害への備えを確かめる日です。

立春から数えて210日目にあたるこの日は、暦の上では二百十日と呼ばれています。台風到来とイネの開花の時期が重なるため、昔から農家の厄日とされていました。そして、大正12年(1923年)9月1日に起きた関東大震災にちなんで、昭和35年(1960年)、国が、「防災の日」と定めたのです。この前年、伊勢湾台風と呼ばれている昭和34年の台風15号が、愛知県や三重県を中心とした中部地方に大きな被害を出したことが、「防災の日」制定のきっかけとなりました。

学校としては、この日にあわせて避難訓練を実施することが多く、大谷口小学校では9月21日(木)、地震体験車による体験と、火災時の煙体験をあわせて行いました。

地震を体験した5年生は、「体験車はテーブルが固定してあったから、つかまれたけれど、家では固定していないので心配。」「実験なので安全だとわかっているから落ち着いていたけれど、本当の地震では落ち着いていられないと思う。」「体験では、一人ではなかったけれど、家では一人でいるかもしれないので不安。」などと、とてもしっかりした感想を発表してくれました。

本校は、避難訓練を年3回実施しています。関東大震災では、死者・行方不明者が、約10万5000人とされていますが、東京での死者約6万人は、地震後に発生した火災によるものとみられています。このことから、3回とも地震発生時の身の守り方と、地震後、火災が発生したという想定で、毎回、火災の状況や発生場所を変え、避難方法や避難経路の確認など、避難時の行動のしかたを訓練します。

このほかに、引渡訓練を年1回実施しています。引渡訓練では、竜巻を想定し、発生時の身体保護と、終息後の通学路に被害が起きたとして、児童を保護者に引き渡すまでの行動を確認します。

2011年3月11日(金)午後2時46分、皆さんはどうしていましたか。

当時の私の勤務校も6時間目の授業が始まって間もなく、震度5強で揺れました。生徒と教職員は、地震発生の訓練通りに怪我もなく行動しました。通学路の安全点検後、生徒は一斉下校しました。夕刻、市の担当職員が来校して、学校に避難場所を設置しました。翌日、避難者がいなかったため、避難場所の設置は解除されました。土日に校舎の安全を確認、3月14日(月)は生徒たちが全員無事登校して、学校は平常通りに始まりました。3月15日(火)、卒業式が予定通り举行されました。後日、地震当夜は保護者が帰宅できず、子どもたちだけのご家庭があったこと知り、心が痛みました。

その後の6年間、災害に対して、社会は多くのことを学び、備えを改めました。学校も同様です。児童生徒の留め置きを含めて、安全確保のための手順や保護者への引渡し手順を整備し、訓練の内容を見直しました。どの訓練も、子どもたちは自分自身の安全確保の方法を身に付けること、職員は子どもたちの命を守るための最適な行動の確認を目指して実施しています。さらに、子どもたちには、万一の時は、社会の一員として役割を果たすように話しています。また、地域自治会の皆様や市の主導により、学校の避難場所としての機能向上を目指して、運営訓練が行われています。今年も10月7、8日、大谷口小・中学校避難所運営委員会の皆様により、避難場所開設訓練が実施されます。

みんな、本気で取り組んでいます。

先日、弾道ミサイルの飛来により、Jアラートが埼玉県でも起動した場合について、通知いたしました。児童の在校中の避難行動は、基本的には竜巻発生と同様です。想定される災害が増えてしまいましたが、これは、我々の知恵が進歩する機会ととらえ、日々の備えを充実していこうと考えています。